

すぽっとライト

NO. 42

四国運輸局では、公共交通機関の事業者、利用者等から交通施策全般についての意見や提言を聞き、行政に役立てていくためのインタビューを実施しています。

今回は、香川県の離島「直島」と香川県高松市、岡山県玉野市宇野とを結ぶ航路を6隻の船舶で運航され、離島住民の生活の足を支えておられる船舶運航事業者である、四国汽船(株)の野崎社長（※当時、現会長）にお話を伺いました。

直島の概要

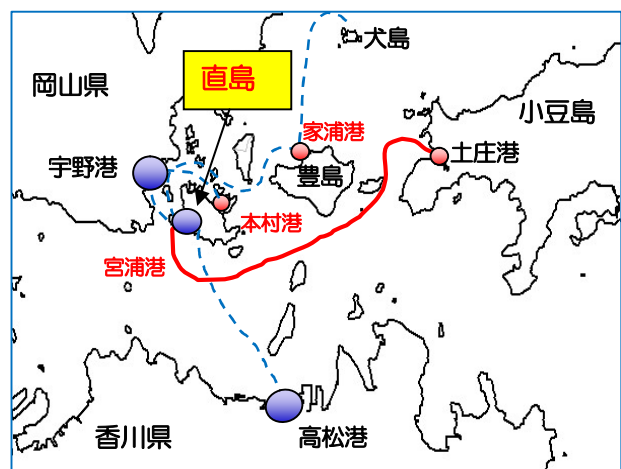
直島は、高松市からフェリーで約50～60分の距離にあり、面積約14平方キロメートル、人口約3,100人の瀬戸内海に浮かぶ大小27の島々からなる豊かな自然と歴史を有する町であるとともに、近年は「芸術の島」として世界的に注目を浴びる観光リゾート地として変貌をとげており、「過疎の島」と「芸術の島」との2面性を持ち、交流人口の拡大が進んでいます。



島はもともと海運業や製塩業の島として栄えていましたが、大正時代に銅製錬所が建設され、さらに発展しました。その後、平成に入ってホテルや美術館の建設・開館が進み、島全体を現代アートの美術展として発信することが話題になり、瀬戸内国際芸術祭の舞台としても知られ、多くの観光客が訪れています。

車で1周20分程度の島内には、島の玄関口である宮之浦エリア、空き家等を改修した「家プロジェクト」等がある本村^{ほんむら}エリア、複数の美術館を有する美術館エリアといった観光エリアがあります。

直島への交通手段は、岡山県からは宇野港からフェリーで20分・高速艇で15分（宮浦港）、高速艇で20分（本村港）、香川県からは高松港からフェリーで50分・高速艇で25分（いずれも宮浦港）のほか、直島から豊島（家浦港・22分）を経由して犬島（犬島港・25分）を高速艇で結ぶ航路もあります。また、瀬戸内国際芸術祭の期間中には、小豆島（土庄港）と宮浦港を45分で結ぶ高速艇もあります。



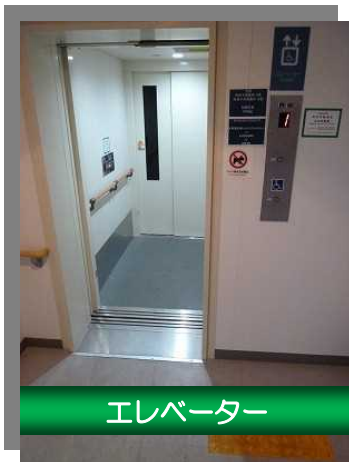
船舶・航路の紹介、事業者インタビュー

直島住民の生活航路となっている高松～宮浦～宇野航路は、国や地方自治体などの補助を受けずに、四国汽船(株)が全長約 23km をフェリー2隻と高速艇3隻で運航しており、うち4隻がバリアフリー基準に適合しています。フェリーは、高松～宮浦が1日5往復、宮浦～宇野が1日13往復、高速艇は、高松～宮浦が通年では1日1往復、3月～11月の金土日祝のみ1日4往復、宮浦～宇野が通年では1日4往復、3月～11月の金土日祝のみ1日3往復となっています。

◆「フェリーなおしま」



用途	旅客フェリー	船質	鋼	航行区域	平水区域
総トン数	1099	長さ	67.61	幅	15
深さ	3.79	航海速度	12ノット		
就航日	H27.5.1	旅客定員	500		



エレベーター



多目的トイレ



車いすスペース




客室 →

手すりの点字



点状ブロック

 瀬戸内国際芸術祭の春会期が4月に終了しましたが、期間中、観光客などのフェリー、高速艇利用者は増加しましたか。また、春会期終了後はどうですか。




香川県が観光の取り組みに力を入れてくださっていることもあり、利用客が増えており感謝しております。最近では直島のみならず豊島へ行かれるお客様も増えているように実感しております。外国人観光客については、アジアからは団体でのご利用が多く、欧米の方はバックパッカー等少人数で来られるケースが多いです。春会期終了後は落ち着きました。

 瀬戸内国際芸術祭来訪者の増加への取組があればお聞かせ下さい。

昨年、直島航路に就航させた新造船「なおしま」は、瀬戸内国際芸術祭に来られる方をターゲットに、瀬戸内の風景を楽しめるような設計にしました。特徴としては、客室窓の高さを膝あたりまで下げましたので、手で海面を触れられそうな感じになります。船体にはアートを施し、船内には絵画や写真を飾り、船に乗ったときからアートを感じてもらっています。外国から来られる方のためのホスピタリティ向上のために、英語による船内放送を行うほか、英語併記の直島案内マップも掲示しています。このほか、当社ホームページの英語版開設のほか、時刻表も英語版を掲載しています。また各支店の看板も英語表記にしています。



 芸術祭の来場者は20歳代と30歳代で全体の約半数を占めているという調査結果が出ています。一方、これまではフェリーの存在が若者にあまり知られていなかった問題がありますが、若者にフェリーを利用してもらうための工夫やとりくみやご意見があればお聞かせ下さい。


海を知らない若者は増えてきています。その中で、船内を今までと変えることにより、

リピーターになってもらい、そこから若いお客様への認知度を上げていけたらと考えております。


また、行政へのお願いとして、海・船を知ってもらえるよう、運輸局からもさらに発信をしていただければと思っています。観光振興も業務の一つかと思っておりますので、学校の遠足等で機会を設けるなど、教育委員会等に働きかけたいと思います。

外国の方には「Seto Inland Sea」で売り込みを図っていますが、未来の利用者確保のためにも学校へのはたらきかけは重要だと思っています。




 一方、離島の住民にとって海上交通は欠くことの出来ない存在ですが、高齢化が顕著な離島住民の生活の足として、普段どのような事に注意、又は従業員への指導をされていますか。

ハード面での対応としてのバリアフリー船就航はもとより、ソフト面での対応として、お客様から好感を持っていただけるよう、接客態度・身だしなみ、お困りのお客様への声掛けをするよう指導しております。

 船員さんは何名ですか。高齢化していますか。


会社全体では37名です。実際高齢化してきており、船員不足と言われている中で、労働環境の整備と、いかに船員を確保するかが今後の課題であると考えております。

 新造船「なおしま」について、利用者からの反応はどうか。




アートの島「なおしま」にあった船体デザインを採用しており、また瀬戸内海を近く感じいただけるよう窓を限界まで広くしております。また、白を基調にした客室にしており非常に明るく感じられる客室になっております。

それを感じ取っていただけているのか、多数のお客様に「きれい！」「船の中とは思えない」というような感想をいただいております。

 利用者はどのような方が多いですか。

近年、観光目的のお客が増えています。島民の唯一の交通手段となっているため、通勤・通学等様々なお客が多数ご利用されます。季節にもよりますが、観光客の占める割合が増えている実感があります。



 四国汽船では、フェリー3隻、高速艇3隻を就航させており、そのうち5隻がバリアフリー基準に適合しています。また、平成12年の交通バリアフリー施行前にすでにエレベーターを備えたフェリー「あさひ」を就航させており、その先駆的な取組により、平成26年3月に四国運輸局長表彰を受賞されました。差し支えなければ今後の計画をお聞かせください。

数年以内に新船（あさひの代替船）を計画しております。まだ、構想段階ではありませんが、現新造船「なおしま」以上にアート、環境、お客様の利便性を意識した船にしたいと考えております。

インタビューを終えて



インタビュー当日は、あいにくの雨模様の平日でしたが、それでも船内は観光客がほとんどで、特に外国人観光客の姿が目立ちました。島内を結ぶバスもほぼ満員で、離島のバスとは思えない混雑ぶりでした。一方、島の名前の由来となっている素直な島民と観光客のふれあいにより、無秩序な観光地ではなく、ゆったり落ち着いた印象を受けました。

直島が抱える課題としては、瀬戸内国際芸術祭が、いわゆる観光シーズンの繁忙期に開催されることから、観光客が集中し、交通機関の積み残し等による不満が当初ありましたが、その後の自治体や交通事業者と観光事業者との連携により、既存航路の増便や臨時航路の開設、島内移動手段の拡充、効率的な情報提供により、周遊性を高め、リピーターの増加に努めてきました。

人口減少や燃料油価格の高騰で航路維持が大変厳しい中、単なる離島の輸送機関ではなく、瀬戸内国際芸術祭の目的である「海の復権」のため、「人口減少や、燃料価格の変動に関係なく、船は安定して動かしていかなければなりません。」と笑顔で話された野崎社長の言葉が大変印象的でした。

インタビュー実施日：平成28年6月7日（火）・聞き手：竹内、中村